

目次

はじめに 4

1 ■ わたし、活動弁士になる！ 7

山形の日々 8 文武両道 10 大学で関東へ 12 テレビの世界 14 活弁と出会う 18 活動弁士になるチャンス
平成の無声映画常設館「東京キネマ倶楽部」 23 チャップリン映画祭で感動！ 26 「活動弁士」を続けたい 29
故郷公演は出会いと発見の連続 30 「カツベン？ なんだもんだが」 33 ミュージシャンとのコラボレーション 35

2 ■ 活弁修業 39

台本が面白くないといけない 40 男の声がほしい 41 アナウンサー口調の時代劇？ 43 字幕が頼りなのに——
言語の壁 43 前説後説がつまらない 45 口パクに合わせる 46 突発！ ハプニング対応に冷や汗 48 「カツベ
ン？」トーンカツ弁当？」 49

3 ■ 無声映画と活弁の時代 51

映画の始まり 無声映画の時代 52 日本の映画興行 55 日本独特の話芸「活弁」 56 最初の巡回活動弁士・興業
師、駒田好洋 58 常設映画館と弁士の存在 59 一世を風靡した当時の弁士たち 65 稀代の人気弁士徳川夢声 68
現代の活動弁士 72

4 ■ 現代「活弁」考 —— わたしの場合 75

「活弁」という語り芸 76 語り方と作り方 78 サイレント映画の発達・進化 79 サイレント映画と弁士の語り
客層による語り分け 84 弁士は声優の始まり 87 声と表情の関係 88 作品選定から台本完成まで 89 ミュージ

シャンとコラボする楽しみ 93 「トムとジェリー」とスラップスティックコメディの演奏 99 小唄映画、主題歌、挿入歌 101 台本は経験や時代でも変わる 105 欲張りな変身願望が満たされる 106 ミクロとマクロの視点——チャップリンへの共感 108 上映・上演に至るまで 110 歴史的建築物とコラボレーション 111 日常のトレーニングと喉のケア 115 現代に生きる弁士の役割 117

■5 ■さまざまな形で生きる現代のエンターテインメント「活弁」 119

最初に観たときの直観は確信に 120 教育の分野で活きる「活弁」 120 「子ども映画館」活弁と音楽の世界」 122 子どもの能力を引き出す「活弁ワークシヨップ」 123 「伝える」力をアップする 126 大人の「活弁ワークシヨップ」 130 福祉の分野で活きる「活弁」 132 活弁の技術を活かした映画音声ガイド 134 聴覚障がい者のための字幕と無声映画字幕 141 アプリ「UDCar」 143 NPOビーマップでのライブ上映活動 145 音声ガイドが活弁にもたらした変化 148 さまざまなコラボレーションとカツベンの可能性 150 「活弁」とともに 152

■6 ■カツベンの実際 159

【オリジナル活弁台本完全収録】「カリガリ博士」 160
映画「カツベン！」 177

■7 ■愛しの無声映画たち 189

愛しの無声映画たち 190
無声映画関連年表 241

【Column】現代人も惚れるロイドの『巨人征服』カフェ上映 38 元祖！ジャパニメーション 138

はじめに

「活弁」

古い廃れた文化だと思っていませんか？

映画の草創期、まだフィルムに音がなかった時代、無声映画、いわゆる『活動写真』には必ず「活動弁士」と言われる説明者がいて、その語りと楽士の生演奏とともに、にぎやかに映画を楽しんでいました。

無声映画には、音がありません。活動弁士は、その説明、解説をする人であると同時に、自分のセンスで登場人物のセリフを巧みに入れて、その話術によって映像世界をナビゲートする役目でした。ある意味、現在のアナウンサーであり、ナレーターであり、コメンテーターであり、アニメや吹き替えの声優であり、シナリオライターでもあり、語り部です。

同じ作品も、弁士の語りによって、ぜんぜん印象が変わります。面白くも、つまらなくも、わかりやすくも、うれしくも悲しくもなるのです。テレビのない時代、「活動写真」は最大の娯楽。それを盛り上げる「活動弁士」は暗がりのスターでした。

わたしは、NHKのアシスタントキャスターから社会人生活をスタートさせましたが、さまざまな仕事をするなかでこの「活弁」に出逢い、魅せられてしまいました。

時代性と普遍性。これは映画そのものが持つ大きな魅力ですが、「活弁」には、さらに、弁士の語りと楽士の音楽によって、一〇〇年も前の無声映画が大きく印象を変えて蘇るといふ魅力があります。

子どもたちには日本独特の文化である活弁公演を体験してもらうことにより、日本の映画文化の歴史に触れ、映画の原点を知ってもらい、豊かな感受性、想像力、創造する力を養っていただくよい機会となります。活弁を知る年輩者にとっては懐かしく、胸躍る映画体験。心も脳細胞も活性化します。

みんなが同じ空間、暗闇のなかで集中して大きなスクリーンを見つめ、泣き、笑い、緊張し、興奮し感動する……かつてはごく当たり前であった、こうした映画の原風景の素晴らしさを、デジタル時代のいまこそ味わっていただきたいと思っています。

佐々木亜希子

■ 1 ■ わたし、活動弁士になる！

山形の日々

確かわたしが三歳のころだったと思います。両親が注文した児童書、段ボール二箱が届きました。三歳くらいのお絵本から小学校高学年の読み物まで、さまざまな本が入っており、それを順に読んでいくのが楽しみでした。

最初に読んだのは、ディック・ブルーナのミッフィーシリーズ『ちいさなうさこちゃん』『うさこちゃんとうみ』『ゆきのひのうさこちゃん』でした。「三つ子の魂百まで」と言いますが、大好きで何度も読んでいるうちに覚えてしまい、母や祖母にそらで語っては、喜ぶ大人の顔に自分自身も得意気だったことを思い出します。祖母もよく子守唄を歌い、昔話をしてくれる人でした。幼少期のわたしは、空想の世界が大好きな想像力豊かな子でした。自我の芽生えも早く、生死について考えたりして、保育園のお昼寝の時間には眠った記憶がありません。

わたしが生まれたのは、日本海に面した港町山形県酒田市。米どころ庄内平野の農村部です。一年一クラスという小規模な上田小学校へ入学するとまもなく、毎朝、母と国語の教科書を音読するようにになりました。先生に「朗読がとても上手ですね」と褒められたのがきっかけで、わたしはますます国語や読書、音読が好きになっていきます。大人たちから「声がきれいなね」と言われたことも、自分の声を好きになるきっかけになりました。

見渡す限りの田んぼと広い空、遠くにそびえる独立峰、鳥海山の勇壮な姿を見ながら、三〇分かけての登下校。その時間は、最高に素敵な想像と創造の時間で、四季折々に移り変わる風景と風の匂いに心を弾ませながら、お話や歌をつくったものです。授業中は漫画を描き、休み時間には友だちと即興芝居。小学校の演劇クラブでは、脚本を書き、出演しながら演出もしました。自作の歌を、既存の曲のような顔で友人たちにも覚えさせ、ステージで発表したこともありました。六年生のときは、演劇クラブの仲間を引き連れ、朝の自習時間に一年生の教室で読みかかせをしていました。まったく自主的な企画でしたが、先生にも一年生の児童たちにも喜ばれ、充実していました。いい思い出です。

兄弟みんなで盛り上がるお楽しみ会も好きでした。父が佐々木家の七人兄弟の長男で、お盆やお正月には、自宅に叔父叔母、従兄妹たちが大勢集まります。お楽しみ会を企画し、司会をし、わたしのつくった「佐々木家のテーマソング」を弟妹と歌い、ミニ芝居をし、叔父叔母たちにも、それぞれに一芸を披露してもらって、みんなの笑顔を見るのがとにかくうれしかった記憶があります。あのころのわたしは、まぎれもなく、いまにつながるわたしです。

また、子どものころから、ノスタルジックなものに惹かれています。小学一年生の夏休みの自由研究では、村の全戸の屋号を調べて地図にし、六年生のときは茅葺屋根について、友人と共同でフィールドワークしながら、その構造、特徴（長所短所）、歴史、現在の状況などをまとめ、発表

しました。とにかく祖父母や両親の子どものころの暮らし、文化に、なんとなく憧れとはかなさを感じ、親近感を覚えていたのです。そして、「人と同じではない、自分ならではの表現で、他人を楽せませたり考えさせたりするような仕事につく」と、一〇歳ごろから漠然と考えていました。すべてが「活弁」や、現在手がけているさまざまの仕事につながっている気がします。

文武両道

農村部の三小学校（上田、本楯、南遊佐）からなる鳥海中学校も全校生徒三〇〇人弱の小規模校でしたが、「文武両道」を掲げる校風で、ブラスバンド部以外は運動部。全校生徒が部に所属し、ハードな練習に勤^{いそ}しむのが当たり前の三年間でした。

「文武両道」は佐々木家のモットーでもありました。母は子どもたちが教師になることを望んでいました。父は市の体育振興会や卓球協会の役員で後に会長も務め、スポーツ振興、子どもたちの育成、指導にも熱心でした。両親がスポーツ少年団で卓球指導をしていたこともあり、わたしも小学四年から卓球を始め、自然な流れで中学では卓球部に。二年の後期から部長を任せられ、非常に人数の多い女子卓球部をどうしたらまとめられるかと苦心しました。「勝つ」ことを目標にした部活動でしたが、人数が多すぎて、全員が大会に出ることができない。選手として選ばれないとわかっていいる部員は、遊びがちになる。どうモチベーションを上げるべきか。強いチームをつくるにはどう

したらいいか。スポーツには、「勝つ」以外に、「健康になる」「楽しむ」「リフレッシュする」などのレクリエーション的側面もあるわけですが、全員で「勝利」という同じ方向に向かうことの難しさと自分のリーダーシップのなさをひしひしと感ずる毎日でした。

同時に、一年生から三年生まで、部活動のように活発に活動している新聞委員会に所属。鳥海中学校は中学校新聞コンクールの上位入選常連校で、当時は、顧問の相蘇眞理枝先生あいそまりえの指導のもと、文部大臣賞や県の最優秀賞をいただいていたいました。あれこれみんな紙面の企画を立て、取材をし、全校アンケートをとったりして記事を書き、レイアウトしていくのは、とてもクリエイティブで楽しい作業でした。国語の先生でもある相蘇先生は、わたしが中学一年で近隣の村に引越すまでお隣さんでした。国語、新聞、作文と三年間お世話になり、日本語の繊細さと日本語を使って表現する楽しさを教えていただきました。東北電力作文コンクールで優秀賞をいただき、仙台まで先生と一緒に表彰式に行ったこと、賞として鳥海中学区の鳥瞰図を作ってもらったことは、中学時代の思い出です。お題は、毎年父が旗をふって家族で行っていた『我が家のクリーン作戦』でした。高校は地元の進学校、山形県立酒田東高等学校に進みました。大先輩に俳優の成田三樹夫さんなきたみきお、歌手の岸洋子さんがいらっしゃいます。このお二人は同期でした。わたしは現在、東京にある同窓会の執行理事と会報の編集長を務めています。最新号では「酒東偉人伝」というコーナーで成田三樹夫さんを取り上げました。

高校時代は、卓球を離れ、サッカーを始めます。地元ではそれなりに強かったうちの中学校から団体戦のレギュラー四人が入学したのに、わたしははじめ一人も卓球部には入部せず、酒田市の卓球協会の手前、父はさぞかし肩身の狭い思いをしたことと思います。両親にはかなり嫌味を言われた記憶があります。わたしも申し訳ないと思いつつ、「自分のやりたいことをやりたい」という思いが強く、サッカー部のマネージャーをしながら、市内のママさんサッカーチームに所属して自分でもプレーするようになり、そのうちに市内で高校の枠を超えた女子サッカーチームを作って大会に出るようになりました。「人と違っていても、反対されても、いろんな壁があっても、自分がやりたいと思ったものを選ぶ」。このある意味頑固な性格のおかげで、活動弁士の道に進むことができず、気がしみます。

大学で関東へ

わたしは、大学へ進学してさまざまなことを学びたい、経験したい、視野を広げたい、と思っていましたが、田舎なせいとか、両親はまだそのころ、「教師になる以外は、女の子は大学に行かなくても」「高校を卒業したら地元で結婚してくれればいい」という感覚でした。サッカーに明け暮れたせいではありませんが、小説まがいのものばかり書いていたこともあり、結局高校時代はまったく勉強に身が入らず、「現役で、国立大学でなければ、進学はさせられない。働きなさい」と言わ

れながら現役合格できなかったわたしは、これまた両親の反対を押し切って新聞配達をしながら東京の予備校に通い、一浪の末、埼玉大学教養学部教養学科へ進むことになりました。「大学では教員免許をとる」ことが条件でした。文学、哲学、倫理学、史学、文化人類学など学びたい分野がたぐさんあり、入学前には専攻を決めにくかったため、大学二年になるときに一五コースから専門分野を選べるという、この教養学科は魅力的でした。

中学高校時代の「学力が高いほうがいい」という価値観が、次第に自分を束縛して、想像力をそいでしまったことや、アウトプットできていないことへの焦り、足元のおぼつかなさ、将来への不安を抱きつつも、大学では、講義、サークル、バイト、お酒、遊び、恋愛と、大学生らしいことを一通り、しかもいま思えばかなりの密度で、体験させてもらいました。わざわざドラマを観たり読んだり創ったりする必要を感じないくらい、日常の実体験がドラマだったかもしれない。さまざまなかまな場面でさまざまな役を演じていて、ときめいて、泣いて、笑って、悩んで、怒って、目まぐるしい日々でした。

本業の勉学はというと、二年のコース分けてイギリスコースを専攻しました。専攻以外の講義もいくらかでも選択できる学科でしたので、フランス、ドイツ、アメリカと、一九世紀末〜二〇世紀初頭のヨーロッパを中心に、文学、文化、歴史、哲学思想、日本文学・文化、文化人類学等々、興味のあるものを片っぱしから受講しました。実は、それが多少なりとも、「活動弁士」として、一九

世紀末に始まり二〇世紀初頭に栄えたサイレント映画の台本を書き、語る、いまの仕事に生きていくと思っています。

卒論はジェイムズ・ジョイスの『若き芸術家の肖像』（一九一六年）について。ジョイスの自伝的要素の濃い作品で、わたし自身の当時の苦悩も重ねて、自分自身が卒論を書くことでカタルシスを得た気がしています。ジェイムズ・ジョイスは、意識の流れという手法で小説を書きますが、代表作『ユリシーズ』（一九二二年）も『フィンガンズ・ウェイク』（一九三九年）も、いくつもの映像が瞬間的に変わり、脈絡があるようでないような、場面がわたしたちの意識のように流れていく、いわば実験映像的な小説です。ちなみにジョイスは、まちがいに当時最先端の娯楽「サイレント映画」に魅了された一人です。アイルランドのダブリンに生まれた彼は、一九〇九年にダブリンで最初の映画館「ヴォルタ座」を設立しているのです。ただし、彼の手がけたほかの事業と同じように、失敗に終わり、あっけなく倒産するのですが、その後も、ダブリンの映画館主になろうと画策した時期がありました。

テレビの世界

大学時代たくさん経験したバイトのなかに、「NHK浦和放送局でのライトマン」があります。ライトマンというのは、カメラアシスタントで、記者やカメラマンのニュース取材に、カメラや三

サイレント映画と弁士の語り

そんなわけで、弁士にとっては、ロングショットが多く一度に多くの人物が動いている初期の作品のほうが、たくさん語る余地があります。一見ただけでは、見逃してしまう人物たちの行動や、そのときの状況、伏線を語りによって押さえておけますから、全体のストーリーがわかりやすくなります。アップの多い作品では、その人物のセリフが中心になりますが、引きの映像では状況説明の語りを入れることが多くなります。

たとえば、一九一一年に製作公開され、子どもたちの人気をかつさらに旋風を巻き起こした連続活劇『怪盗ジゴマ』（仏）は、人物が目まぐるしく登場しますが、ゆっくりアップになる瞬間はあまりありません。しかも、早い展開の中、ジゴマも敵も、変装するは潜伏するはで、だれがだれで何をしてどうなっているのか、それはもう手に汗にぎるような「弁士の熱くて筋の通った語り」が頼りです。こうした作品には、煽り立てるような語りと、次々にスクリーンで入れ替わる登場人物を明確にするセリフの語り分けがかかせません。それが活弁の醍醐味でもあります。

日本映画で、たいへんだけれど台本作りが非常に面白かったのは、目玉のまっちゃんこと尾上松之助主演『雷門大火 血染めの纏』（一九一六〔大正五〕年、日活、築山光吉監督）。江戸の華と言われた火消しの話ですが、場面転換を表す簡単な字幕はいくつかあるものの、セリフ字幕はほとんど



『怪盗ジゴマ』

どなく、次々に登場する人物に細かくセリフをつけ、語りを入れて、辻褄を合わせながら物語を動かしていく作業は、まるで古い文献を読み解いていくような、パズルを仕上げていくような面白さがありました。

D・W・グリフィスの作品も、『国民の創生』（一九一五年）、『イントレランス』（一九一六年）、『世界の心』（一九一八年）などは、一九二〇年代半ばから後半のサイレント映画後期のほかの監督の作品群と比べると、アップが少なく、わりと画面上に数人がいるショットが多いのが特徴です。

しかも、その人物たちすべてが、ただ立っているだけでなく、意味のある行動をとっています。細かいところまでみんながキャラクターを演じていますし、社会背景がわかっていることを前提に作られているので、弁士にとっては出る幕の多い、語りがいのあるサイレント映画です。

活動弁士が人気を博していた大正時代、大衆は「語りで沸かせるくれる」弁士を好んだといえます。谷崎潤一郎ら知的な映画人・文人たちが、「弁士は勝手に解釈し説明をつける」「必要ない」として弁士排斥運動を起しましたが、あくまでも大衆は、活動写真とともに活動弁士の語りを楽しんでいました。

一九二〇年代半ばから後半、日本では大正の終わりから昭和初期にかけては、どんどん洋画の技術が発達したのは前述のとおりで、そうなっていると、少しずつ、あまり余計に語りすぎない弁士のほうが好まれるようになったのではないかと思えます。そんななかで、映像にまかせるところは任せ、浪々と淡々と、間を大事にして語る洋画弁士、徳川夢声が、時代の寵児となったのではないのでしょうか。

客層による語り分け

『怪盗ジゴマ』は、わたしも、国立映画アーカイブ（旧国立近代美術館フィルムセンター）の「こども映画館」で、過去二回、語らせていただきました。子どもたちに語るときは、子どもたちがわかる言葉を選び、状況がわかるようにナビゲートし、セリフも、より大げさにします。子どもたちは、活劇やドタバタ喜劇が大好き。とにかくよく笑い、よく驚き、キャーキャー反応して、登場人物たちと一緒に映画の中の物語世界を楽しみます。

二〇〇五（平成一七）年から一四年間、毎年「こども映画館」で「活弁と音楽の世界」と題した上映に出演させていただきました。『怪盗ジゴマ』ばかりですが、『ピーターパン』（一九二四年）や、キートン、ロイド作品、各国の短編アニメーションで、子どもたちが毎年大喜びしてくれることが、わたしにとっても大きな喜びでした。

小学校公演もそうですが、子どもたちは、画面が白黒でも一〇〇年前の古い映像でも、語りと音楽に乗ってすぐにその作品世界に入ってきてくれます。特に、初期のチャップリンのようなスラップスティックコメディは、その動きとアクションで、理屈なしに、言葉より先に笑います。「うわー」「ああ〜」「ううう……」など、もう言葉ですらなくていいのです。感情を声にしてあげるだけで、小さな子どもたちは状況を把握し、見入ります。

子どもには、ちょっと難しい状況や言葉もありますが、映像と同時に言葉を覚えてもらう機会でもあります。そこはやさしい言い変えも添えて、理解してもらえるように工夫します。会場とやり取りできるのもライブである活弁の魅力。会場の子どもたちから「なんですぐ逃げないの〜！」なんてツッコミが入ると「そうだよね〜！ さあ、逃げろ〜！」とレスポンス。キャッチボールができることで、さらに子どもたちの反応がよくなります。

ご高齢の方が多かったり、映画好きの方が多い会では、ほんとに一瞬しか出てこない役でも、出てきた瞬間すかさず、「若き日の笠智衆」「右側が後の伴淳三郎」「二十歳のころの田中絹代です」「若干十六歳の山田五十鈴。初々しい」などと紹介を差し込みます。「あら〜かわいい」「まあ！ 若い」と、だいたい会場がざわっと反応いたします。懐しい時代背景を楽しめるようなナレーションを入れたり、講談調の語りに寄せたり。特に映画好きの方々が多く静かに作品を味わいたい空気のとときは、あえて心情や状況を語るようなナレーションをひかえ、客にゆだねるシーンが多くなり

ます。

地方公演では、ご当地の方言や、特産物を織り込んだりします。特産物は事前に調べることで、き台本に加えられますが、方言は、現地へ行ってから上映会のスタッフに教えてもらい、その場でセリフを書きかえて耳コピー。にわか作りですが、会場から笑いが起こりスタッフも面白がってくださるとうれいものです。

わたしは現在、シネマート新宿で月に二日、同じ作品を上演していますが、ここでもその日の客層によって、反応も違い、語りや音楽も変化します。『ロスト・ワールド』（一九二五年、ハリー・O・ホイット監督）『月世界旅行』（一九〇二年、ジョルジュ・メリエス監督）を二本立てで上演した際のこと。初日は日曜の昼。よく笑いよくしゃべるお子さんが客席にいて『月世界旅行』で大笑いすると、「ジョルジュ・メリエス最高！ もっとやって！」とのかけ声。会場中が笑いに包まれ、続く『ロスト・ワールド』もお客さまたちが総じて笑しげに笑ってくださいるのでついアドリブが入り、コメディ寄りになりました。が、二日目は平日夜。大人の会で、会場の笑いが少なめだったため、わたしも生演奏の永田雅代さんもどんどんシリアス、迫力の方向へ行き、用意していたツッコミも半分はカットして、危険や恐怖に立ち向かう冒険ものとなりました。両日ご覧くださった方々は、「ぜんぜん印象が違いましたね！ いやあどちらも面白かったし、二度美味しかったです」とおっしゃいましたが、どちらがよかったのか、わかりません。自分自身はどちらも面白かったです

あとがき

いまや、だれでも、いくらでも映像を生み出せる時代です。加工もいくらでも可能です。巷には、映像があふれていますし、テレビ、インターネット、ゲームなどがあるなかで、映画自体も、昔ほどの娯楽ではなくなってしまったのかもしれませんが。

そんな時代だからこそ、昔、貴重な映像を、みんなが集い合って、人いきれのする会場で語りとし演奏のついた映画を楽しんだ、その空間を、味わえたらと思うのです。いい作品に単純に感動してもいい。活弁と生演奏と映像というパフォーマンスに感激してもいい。いまは当たり前で、古くなった映画の表現に当時の映画人たちの苦勞を思ってもいい。映像から当時にタイムスリップするような感覚もいい。観たら、きっとなにかを感じとってもらえると、わたしは確信しています。

映画は人類の財産、時代を切り取る鏡です。その時代を知るオールドファンの方々にも、初めて体験する子どもたち、若い世代のみんなにも、懐かしく、新しく、温かく、心躍る楽しいエンターテインメントです。ぜひ、空間ごと体験していただきたく思います。

大学の先輩である編集者志賀信夫さんより「本を書きましよう」とお話をいただいてから一年。ようやく上梓の運びとなりました。

振り返ると、これまで大小約一〇〇〇回の活弁公演、二〇〇あまりの作品、映画音声ガイドも一

〇〇作品ほど手がけさせていただけ이었습니다。幸せなことです。活弁上映は一人ではできません。どの公演も、映画祭も、たくさんの方が関わり、支えてくださっています。

とよはしまちなかスロータウン映画祭、はままつ映画祭、しんゆり映画祭、小津安二郎記念蓼科高原映画祭、米沢・伴淳映画祭、カナザワ映画祭、さぬき映画祭、栃木・蔵の街かど映画祭……、国立映画アーカイブ、広島市映像文化ライブラリー、北区文化振興財団、児島文化協会、茅ヶ崎館や霧笛楼、シネマヴェーラ、シネマート新宿、調布シネクラブの関係各位のみなさま、共演のみなさまと、まだまだ挙げきれない多くの方々にお世話になってきたことを改めて思い起し、感謝に尽きません。バリアフリー映画の関係各位、NPOビーマップのメンバーたちにも深謝です。

小学校から大学時代までの恩師の先生方、NHK時代にお世話になったみなさま、わたしを活弁に導いてくれた斎藤弘美さん、そして、活弁の面白さを教えてくださった澤登翠先生、マツダ映画社さま、応援くださっているみなさまに、この場をお借りして、心より厚く御礼申し上げます。一番の応援者になってくれた両親、家族にも感謝でいっぱいです。

また、映画『カツベン！』を世に送り出してくださいました周防正行監督、その公開に向けて慌ただしいなか、お世話になりました東映宣伝部さまに、心より御礼申し上げます。なかなか筆の進まないわたしを根気強く待ち、励まし、背中を押し続けてくださいました編集者志賀信夫さん、誠に誠にありがとうございます。まだまだ道半ばです。自らを磨きながら、みなさまに喜んでいただけよう精進して参ります。

佐々木亜希子（ささき・あきこ）

山形県酒田市生まれ。活動弁士。酒田北前大使。山形県立酒田東高等学校、埼玉大学教養学部を卒業後、NHK山形放送局で契約キャスターとしてニュース番組などを担当。フリーとなり、2000年12月、東京キネマクラブで活動弁士としてデビュー。故松田春翠弟子の女性活動弁士、澤登翠氏に師事。全国各地の映画祭を始め、国立映画アーカイブなどにも出演。シネマート新宿などで定期的に活弁映画上映、活弁ワークショップなどを行う。現在200以上のレパートリーを持つ。活弁、朗読、ナレーション、舞台出演、司会、講演、執筆など幅広く活躍。視覚障害者もともに楽しめる映画音声ガイドに携わり、2010年にNPO法人「Bmap」を立ち上げ、バリアフリー映画の普及活動を積極的に行っている。

掲載した無声映画の写真は、特に記述のないものは基本的に（株）マツダ映画社様提供です。

カツベンっておもしろい！

現代に生きるエンターテインメント「活弁」

2019年12月20日 初版第1刷印刷

2019年12月25日 初版第1刷発行

著者 佐々木亜希子

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル2F

TEL: 03-3264-5254 FAX: 03-3264-5232 振替口座 00160-1-155266

装幀／奥定泰之

印刷・製本／中央精版印刷

組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1893-1 © Akiko Sasaki 2019, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。